

【書評】

山形浩生による教養、あるいは抑制の試みを経た（だが結果としてしばしば抑制など効いていない）言論的狂気について
 ～『断言 読むべき本・ダメな本—新教養主義書評集成・経済社会編』
 （山形浩生，Pヴァイン，2020年）

河 崎 環[†]

現代日本が密かに誇る知的サディストの山形浩生による書評集だなんて、90年代から彼の尖りまくった書き物をお好きな方にはもはやボルノに等しい興奮度である。この本でも案の定、のっけから「うるせえ。自分が正しいかどうかわからないなら、わかるまで黙ってる」（p.17『はじめに』）と猛々しく言い放つなど、読む者の息を荒くするご乱行ぶりだが、そうそれが山形であり、山形の読者は、時としてあまりに攻撃的な山形の思想自体に諸手を挙げて賛成するとまで行かずとも、彼のそんな好戦的な言論スタイルをワクワク期待している観客だ。

東京大学大学院工学系研究科（都市工学専攻）在学中の87年にH・R・ギーガーの邦訳でデビュー、90年代は野村総合研究所に研究員として勤務する傍ら、ビート・ジェネレーションの白眉たるウィリアム・S・パロウズの邦訳書を次々と発表した。その後、マサチューセッツ工科大学大学院（不動産センター修士課程）留学中に書店で出会ったという経済学者ポール・クルーグマンの著書も決して山形の専門ではないながら日本へ紹介、野村総研の開発援助アナリストとして兼業文筆業にさらに邁進した2010年代にはトマ・ピ

ケティのあの（分厚い上に難解すぎて常人なら途中で諦めて枕にする）『21世紀の資本』の共同邦訳まで手がけるなど、山形はSFと経済分野での翻訳家としての旺盛な活動でよく知られる一方、評論家としての舌鋒の鋭さにも定評がある。

彼が「雑文」と呼ぶ、これまでの長短さまざまな評論作品に通底するのは、彼の徹底した教養主義と、わざと卑近を演じてみせてむしろ際立つ潔癖さ、そして揺るがぬエリート意識だ。興味が一瞬でも湧いたなら、不案内な分野こそ大量に読み調べ、事実関係を整理し、その上で意見を形成し、そのプロセスと自らの学習質量に対する絶大な自信とともに名言も暴言も堂々と吐く。

彼の物書きとしてのキャリアが成熟する過程と、インターネットカルチャーの成長がちょうど一致することもあって、彼の作品やメディア、SNSでの発言は匿名掲示板でかなり物議を醸し、本人も積極的に参戦して暴れてきたようだ。山形に限らず、現在インターネット界隈で「論客」という曖昧な呼称で括られるような40～50代のネット有名人を見ると、かつては自分のHPを持ちながら掲示板で暴れ、やがて自己発信を始めたブログで炎上し、（今やコンテキストを意図的に無視した言葉の断片だけで応酬するチンピラのファイトクラブに唯々として成り下がった）日本語Twitter

[†] 立教大学社会学部兼任講師
 tami.kawasaki@rikkyo.ac.jp

terに河岸を変えていまだに小競り合いを日常とする（それをタフと呼ぶのなら、タフな）人々が多い。日本の2ちゃんねる文化を熱心に支えていた層の少なくとも一部は、実はこういう年代（現在50代周辺）でこういう知識レベル（高学歴）の人々だったのだとわかるし、良くも悪くも日本のネット文化の特性は彼らによって培われてきたのだと理解できる。

山形の戦歴も派手だ。2000年に浅田彰『構造と力』の“クラインの壺”の例え話の誤りを軽く指摘してネット言論界（そういうものがあるとすれば）でちょっとした騒ぎを起こし（のちに浅田本人から反論を受けている）、2014年にはトマ・ピケティ『21世紀の資本』を邦訳（英語版からの重訳）するにあたり、その出来に関して外野から余計な心配と山形に対する無為な知的マウンティングを繰り広げるネット民に向かって「(大丈夫、この本に) フランス現代思想みたいな得体の知れないファッショナブルナンセンス/知の欺瞞は皆無だ」「ご要望に応じて急いで訳はあげますので、ホント買って読んでね。急いで訳しても印税増えないのよ。だから僕たちは急いでもぜんぜん得しないのに、君たちのためを思って頑張るんだから」（『断言 読むべき本・ダメな本—新教養主義書評集成・経済社会編』, pp.88-89）とブログにて彼らしい皮肉たっぷり「寛容さ」で前置き。

経済本に進出してからは特にネット民からの「誤訳」「不勉強」「尊大（それは彼の性格の話であって、翻訳の質とは関係ないが）」といった根拠のあるようなないような指摘に雨敵と晒され、東アジアに対して決して謙虚とは言えない山形の姿勢や発言から「ネトウヨ」と呼ばれ、アベノミクスで「リフレ派」なる言葉に注目が集まってからは、山形がその一員であるとしてネット上のアンチリフレ派から標的にされた。でもその理由は、つまるところ山形がずっと「好んでネット上に居

続けた」からだ。他の「ネット論客」同様に、彼はそこを庭にしてきた。

その後サラリーマン兼業（今様に言うならばパラルレルキャリア）をやめ、専業文筆家となって世間のニーズを広い心で受容するようになったのであろうか、以前の彼であったなら心の底から軽蔑していたに違いない一般経済誌『PRESIDENT』（2020.5.29号）の名著紹介の企画ページでは、そこそこ仏頂面ではない顔写真と共に『利己的な遺伝子』（40周年記念版、リチャード・ドーキンス/紀伊国屋書店、2018）を紹介。「……名解説書。なぜ人間が利己的でないかを解説しているのに、題名だけ見て誤解している人が多く、バカ判定機としても有用」（p.53）と書き、黙っていい人のふりをしておけばいいのに、また無垢で素直な読者たちに余計なジャブを打っている。

最近でも、2020年11月28日にはTwitterで

「武邑光広の本が献本されてきたけど、バロウズだのネットだのについてくだらない世迷いごとを並べてた時代からまったく進歩しておらず、プライベートだのネットだのについて、断片的なニュースを並べ立てて、問題だとか考えねばならないとか、最後まで結論もまとまりも出せない。無価値な本。捨てる。」

と言い捨てるなど、およそ30年に渡る書評家としてのキャリアを経ても、何も丸くなっていない。「CUT」や「GQ」「スタジオボイス」などのカルチャー誌で書評連載をしたり、朝日新聞の書評委員になったり、種々様々な雑誌の書評欄などかなりの大舞台で書評を発表してきても、提灯など持たず彼が駄本と感じたものは駄本と切り捨てるのは、もはや彼の伝統芸だ。山形に新著を献本する著者や編集者は、実に勇気と向学心と、若干の被虐嗜好があると思う。

そんなふうには、自分の美意識に見合わない人間や考えや本に対して、つい皮肉を言わずにはおれず、茶々を入れずにはいられない生来のお行儀の悪さを抑制しようとしているのかいないのか（たぶん可能な限りしていない）、山形の「書評集成」は彼らしい言論的おイタの「集大成」でもある。この本の帯文で荻上チキが

「速度過剰な情報社会で、〈論争〉が成立し難しくなっている中、これぞパワフルなマジレスだなんて感動する……。」

と書くように、ここまで言葉による殴り合いに躊躇せず好戦的な「論客」は、もう今の（インターネットセキュア志向で、まさか実名で事を荒立てることなど毛頭望まない）30代以下にはなかなか見当たらず。そういった意味で山形的な言論のあり方は、ネット黎明期にパソコンをおもちゃにしていたブレイン（頭でっかち）な世代特有の、

逃げ切った（山形はかつて浅田批判をしたが、まさに）スキゾな奴らしいファイトスタイルなのだろう。

大辛口の書評家・山形浩生が30年近くに渡って書き綴った書評の、いわば傑作選。アイデアの上下やイデオロギーの左右は一旦不問に付し（そうでなければいちいち引っかけって一向に先に進めないからだ）、山形のなんだかんだ端正な文章、軽快なリズム、軽妙な機知を楽しみ、何よりも書評の書き方を学び取れる本として、これを愉快地笑って読まずにはいられない。トリックスターゆえ批判されるが、実のところ彼は文章の名手である。書評集という字ばかりの堅い本のはずなのだけれど、電車の中で油断して読んではいけない。2020年がマスクの年で、ホント良かった。（※以上全編、全力で褒めておりますご理解ください。）